

古英語における主語・目的語の標示に関する一考察

平 尾 政 幸*

伊 原 五 郎**

1. 序章

本論の目的は古英語における主語と目的語の標示 (marking) に関する調査及び考察である。現代英語においては主語と目的語は word order によって表されているが古英語においては必ずしも現代英語のような word order が使用されていたわけではなかった。むしろ主語・目的語の標示に関しては word order というよりも名詞および形容詞などの格変化による標示が行なわれていた。本論では古英語福音書ヨハネ伝⁽¹⁾をテキストとし SVO を含む主節を選び出しそれぞれについて主語・目的語がどのような方法によって標示されていたかを調査した。

今回の調査の基本的な概念は以下の二つである。その一つは word order である。つまり古英語においては word order が主語・目的語の標示についてどの程度その機能を果たしていたのかという点である。もう一つは case marking、つまり名詞や形容詞などの格変化がいかに主語・目的語の標示について機能していたかという点である。もっとも主語・目的語の標示についてはそれぞれの語の持つ意味的な側面や動詞の変化形、あるいはさらに範囲を広げれば文脈等の関連においてもその判断の規準を求めることが可能である。しかしながら一回の調査において行なう調査項目は限定すべきであり、今回はその内の特に word order と case marking の二項目に限定することにした。そして一部の例に

関してのみ後半において意味的な側面や動詞の変化形また文脈について主語・目的語の標示機能について調査した。

今回の調査の基本的な概念である word order と case marking の重要性については既に Hirt (1934)⁽²⁾や Givón (1984)⁽³⁾によっても述べられている。例えば Hirt は印欧語の syntax の方法として以下の三つをあげて説明している。それは 1. word order 2. inflexion 3. intonation である。つまり古英語を含めた印欧語においては以上の三つの方法が syntax において重要な役割を占めていたと考えられる。ただし実際の調査における問題点として、三番目の intonation を古代語において知ることは不可能であるため今回の調査においては word order と格変化に限って分析を行なうことにした。

2. 古英語の語順

まず最初に word order⁽⁴⁾調査方法について若干の考察をしてみたい。基本的な方針としては 1. SVO を含む主節の word order について調査を行なうということである。ここで主文と言わず主節としたのは古英語の場合写本等に現代英語のピリオドにあたるものが使用されておらず、文という概念が適用できないからである。またその 2. として否定の要素を含まない節に限定するということである。その理由は否定の要素を持った節の語順は持たないものとは異なる

* 東京情報大学非常勤講師

** 東京情報大学教授

った特別の語順を取ることが知られているからである⁽⁵⁾。また3.として二重目的語を持つものは複雑さを避けるために除外し目的語は直接目的語に限定した。

なお今回の調査では使用したテキストを一つに限ったのでそれを補うために Brown が *Pastoral Care* において行なった word order の結果も参照したい。但し、Brown⁽⁶⁾の調査においては目的語が直接目的語と間接目的語を区別することなく扱われているため若干の方法上の違いが見られるが、直接目的語と間接目的語を含めた包括的な観点からの word order を見るためには有効であると考え、ここに引用した。また Brown の調査においては主節と従属節に分けどの割合でその word order が現われたかによってデータを取っているので具体的な数値に関してはその percentage から算出した。それによると、SVO が140例 (56%)、SOV が30例 (12%)、VSO が51例 (20%)、VOS が25例 (10%)、OSV が2例 (0.8%)、OVS が18例 (0.4%) となり、そこでは SVO を中心として SOV や VSO が基本的な word order であったことがうかがえる。

3. 古英語福音書の語順

次に古英語福音書の語順を調査した結果を見てみると現代英語において主流を占めている SVO の語順が68例 (66%) と最も多く、以下 SOV 14例 (14%)、VSO 9例 (9%)、OSV 10例 (10%)、VOS 1例 (1%) といった頻度で現われている。従って word order が S と O を区別するのに決定的な役割を果たしていたとは考えられない。但し S と O の語順の一般的傾向は存在していた様で S が最初に来る節が82例と最も多く以下2番目に来るもの19例、最後に来る節は1例にとどまった。次いで O については O が最初に来る節が10例、2番目に来る節が15例、最後に位置している節が77例と圧倒的に多い結果が得られた。以上の結果から古英語において S と O の来るべき位置についての一般的な傾向は存在するものの決定的な word order が存在しない

ため word order にのみたよる主語・目的語の区別には困難があったと思われるのである。

またテキストとして使用した *West-Saxon Gospel* は聖書のラテン語訳の翻訳であるので OE における語順とラテン語⁽⁷⁾における語順とを比較した。それによるとその語順は必ずしもラテン語訳の通りにはなっていないことが明らかである。例えば資料1にある様に OE の SVO 語順はラテン語の SVO 語順から翻訳されているものもあるが、他の語順である SOV、VSO、OVS、VOS、OSV などから翻訳されている例もある。しかし OE の SOV 語順については SOV 語順から翻訳されている例もあるが、逆に SVO から翻訳されている例もある。このような点から OE の語順はラテン語の語順とは違った独自の語順を持っていたことがうかがえる。また OE の語順はラテン語の語順ほど自由ではなかったということも言える。つまり OE の語順はラテン語に比べてかなり固定化していたと考えられるのである。

4. 格変化

次に第二の調査項目である case marking について考察したい。古英語における case marking は、現代英語で名詞に関しては genitive において、代名詞においては genitive と dative においてのみ残存しているものとは異なり、genitive, accusative, dative, instrumental において case marking が存在していた。ここで問題になるのは主語・目的語との区別について格変化による形態的差異がどのような役割を果たしていたかということである。そこで古英語の格について代表的に主語になりうる nominative と目的語になりうる accusative の二つに分類した。古英語においては目的語になりうる格として一般的には accusative が使用され、特殊な例として genitive や dative も存在したがその数は少なくここでは主として nominative と accusative の対立を主に考察した。

まず名詞の格変化に関しては複数形においては全ての形態において nominative と accusative

において同じ形態であるため *nominative* と *accusative* の形態的対立は存在しない。また単数においてもそのほとんどにおいて *nominative* と *accusative* の形態が同じであったので主語と目的語の標示に関しては機能的に曖昧な点が存在していたと考えられる。

次いで定冠詞については名詞と同様に複数においては *nominative* と *accusative* の対立がなく、また単数においても中性において対立がなく男性単数と女性単数においてのみ *nominative* と *accusative* の対立が存在していた。

次いで形容詞については定冠詞と共に使用される *weak declension* においては、複数形および男性単数と女性単数において *nominative* と *accusative* の対立がなく、また形容詞単独で使用する *strong declension* においては男性単数および女性単数においてのみ *nominative* と *accusative* の対立が存在していた。

最後に人称代名詞においては三人称の複数形と中性の単数形を除いた一人称と二人称の単数、双数、複数において *nominative* と *accusative* の対立が存在していた。このような古英語においては *syncretism* により *inflected language* において主語と目的語の判別に重要な役割を果たしていた *nominative* と *accusative* の対立が著しく欠けていた。以上のことを踏まえて次に *word order* の分析の際に使用した例文における格変化による主語と目的語の標示の調査及び分析に移りたい。

5. 語順と格標識

このようにほとんどの例において格変化による主語と目的語の区別については両方とも、あるいはそれらのどちらか一方が標示されていたが問題は (5) に分類された、主語・目的語について双方ともに格変化によって区別されていないものである。本論末の資料2はその一覧である。これらの例については冒頭でも触れたように今回の基本的な調査項目である *word order* と格変化が機能してない例であるため、それ以

外の主語と目的語の標示について機能を持っていると考えられるそれぞれの語の持つ意味的な側面と動詞の変化形及び文脈からの考察を試みてみたい。

まず語の持つ意味的な側面としては主語と目的語をそれぞれ主語になる傾向の強い *animate* と目的語になる傾向の強い *inanimate* に分類した。そうした場合 (5) に分類された16例は、2種類に分類される。一つは両方とも *animate* であるもの、もうひとつは *animate* と *inanimate* が一つずつ共起するものである。後者においては *animate* と *inanimate* それぞれが主語と目的語になっており、主語・目的語の標示についての問題はない。問題は一つの節の中の主語と目的語の双方において *animate* であるものでそれらは資料2の星印(*)のついている2例である。

次いでこの2例について動詞の *inflexion* で主語と目的語の標示がなされているかどうかという点について見ると、20.2は複数の過去形の動詞に複数の主語と単数の目的語が使われており、主語と目的語の標示が動詞の数の一致による変化形によって標示されている。ところが1.45では主語と目的語ともに動詞の数に一致していて主語と目的語の標示がなされていないことになる。このような例における主語と目的語の区別には文脈其他による判断が必要とされるので次にその周辺の箇所を引用して考察してみたい。

1.43 : ..., and hē gemētte Philippus; and sē Hælend cwæð tō him, Fylig mē.

(..., and he (Jesus) found Philip, and Jesus said to him, "Follow me.")

1.44 : Sōðlice Philippus wæs fram Bethsaida, Andreas ceastre and Petres.

(Truly Philip was from Bethsaida, the city of Andrew and Peter.)

1.45 : Philippus gemētte Nathanael, and cwæð tō him, Wē gemēttan pone Hælend....
(Philip found Nathanael, and said to him, "We have found Jesus, ...")

1.45の *Philippus gemētte Nathanael* は、フ

フィリップがナタナエルに会ったと言う場面で、ヨハネ伝が始まってから、この個所に至るまでにフィリップはすでに登場し、フィリップについての記述はあるがナタナエルはここで初めて登場するのである。このことからこの場合フィリップが主語であることが明らかになる。

以上の例を含めた(5)に分類される16例についてはそのすべてがSVO語順であったこと、また全体のSVO語順が約7割と非常に多いこと、また(5)に分類された主語と目的語の語順の逆のパターンであるOVSが非常に少ないこと、そしてその2例においては文脈のみが主語と目的語の標示について機能していた点を考えるとSVO語順がOEの語順においてすでにその主流を占め次第に主語と目的語の標示についての機能を担いつつあったのではないかと考えられるのである。

6. 結論

以上の考察から古英語における主語と目的語の標示はその大部分の例において名詞や代名詞、形容詞などのmodifierの格変化によって明確に示されていたもののnominativeとaccusativeの形態的対立を欠いた格変化においては完全に機能していない例もあり、代表的な主語と目的語のword orderや動詞の形、あるいはanimate, inanimateといった意味的な側面、また文脈から主語・目的語の標示が行なわれていたと言える。

このことは中世以降さらに簡素化の進んだ格変化によりますますその形態的対立を欠く様になった主語と目的語の標示が、一般化しつつあったword orderにその機能を求めつつ次第に現代英語へと固定化していったと言えるのである。そして本論において述べたnominativeとaccusativeの格標識の形態的対立と語順に関する一連の概念は英語史及び他の印欧語の歴史を考える際に極めて重要かつ不可欠であると言える。

注

- (1)本論の資料としてはBright (1904)を使用した。
- (2)Hirt (1934: 9-10)
- (3)Givón: (1984: 9-10)
- (4)これまでにOEのword orderを取り扱った主な研究書は以下の通りである。Carlton (1970), Fries (1940: 199-208), Brown (1970), Shannon (1964)
- (5)Mitchell and Robinson (1986: 64)は否定の要素を持つ節の語順について以下のように述べている。“The phenomena adverb+VS is a word order of negative clause. “In OE the order is found in ...4. Negative statements, e. g. *Ne com se here*. ‘The army did not come’.
- (6)Brown (1970: 89)
- (7)本論においてはE Nestle (1957)編のラテン語聖書を使用した。

資料1 ラテン語順との比較

OE の SVO に対応するラテン語の語順	SVO(13) VO (8) VSO (8) OVS (3) VOS (2) OSV (2) VO(20) OV(12)
OE の SOV に対応するラテン語の語順	SVO (6) SOV (2) VOS (1) VO (4)
OE の VSO に対応するラテン語の語順	VSO (2) VOS (2) VO (5)
OE の VOS に対応するラテン語の語順	VOS (1)
OE の OSV に対応するラテン語の語順	OVS (3) OV (7)

尚 OE の102の主節に対するラテン語順の節の総計が一致しないのは7.29のラテン語において OE の相当箇所が存在しないためである。

資料2 (5) (格変化が主語・目的語の標示をしていない) に分類された例

- 1.15 : *Iohannes cȳp gewitnesse be him*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (John testifies about him,...)
- *1.45 : *Phillippus gemette Nathanael*,...
 (Animate) (Animate)
 (Phillip met Nathanael,...)
- 2.10 : *Ælc man sylþ ærost gōd wīn*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (Everyone serves good wine first,...)
- 9.22 : *His māgas spæcon pās þing*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (His parents said these things,...)
- 10.27 : *Mīne sceāp gehyrāþ mīne stefne*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (My sheep heard my voice,...)
- 10.31 : *Dā Iudeas nāmon stānas pæt hig woldon hyne torfian*.
 (Animate) (Inanimate)
 (The Jews took stones to kill him.)
- 12.41 : *Isaias sæde ðās þing pā hē geseah hys wuldor*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (Isaiah said these things when he saw his glory,...)
- 12.43 : *Hī lufodon manna wuldor swīð or þonne Godes wuldor*.
 (Animate) (Inanimate)
 (They loved praise from men more than praise from God.)
- 18.2 : *Witodlice Judas, þe hyne belæwe, wiste pā stowe*;
 (Animate) (Inanimate)
 (Truly the Jews, who betrayed him, knew the place.)
- 18.10 : *Witodlice Simon Petrus ateah his swurd*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (Truly Simon Peter drew a sword,...)
- 18.21 : *hī witon pā þing þe ic him sæde*.
 (Animate) (Inanimate)

- (*They knew these things which I said to him.*)
- 19.19 : *Witodlice Pilatus wrāt ofergewrit*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (Truly Pilate wrote a title,...)
- 19.20 : *Manega ðære Iudea ræddon pis gewrit*;
 (Animate) (Inanimate)
 (Many of the Jews read this sign.)
- 19.29 : *hī bewundon āne spyngan mid ysopo, sēo wæs full ecedes*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (They put a sponge which was full of the vinegar on a hysop plant.)
- 19.40 : *Hig nāmon pæs Hælenendes lichaman*,...
 (Animate) (Inanimate)
 (They took the body of Jesus,...)
- *20.2 : *Hī nāmon Drihten of byrgene*,...
 (Animate) (Animate)
 (They took the Lord out of the tomb,...)

BIBLIOGRAPHY

- Bean Marian C., *The Development of Word Order Patterns in Old English*, London: Croom Helm. 1983.
- Bosworth Joseph and Toller T. Northcote, *An Anglo-Saxon Dictionary*. 1989. Oxford: Oxford University Press. 1973.
- Brown William H., *A Syntax of King Alfred's Pastoral Care*. The Hague: Mouton. 1970.
- Campbell A., *Old English Grammar*. 1959. Oxford: Oxford University Press. 1987.
- Cassidy Frederic G. and Ringler Richard N., (eds.) *Bright's Old English Grammar & Reader. Third Edition*, 1891. New York: Hold, Rinehart and Winston, Inc. 1971.
- Comrie Bernard, *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Basil & Blackwell. 1981.
- Crystal David, *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. 1985. Oxford: Basil & Blackwell. 1988.
- Davis Norman, *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. 1882. Oxford: Oxford University Press. 1953.
- Fries, C. C., "On the Development of the Structural Use of Word-Order in Modern English," *Language* 16. 1940.
- Givón T., *Syntax: A Functional-Typological Introduction. Volume I*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 1984.
- Grünberg M., *The West-Saxon Gospels: A Study of the Gospel of St. Matthew with Text of the Four Gospels*. Amsterdam: Scheltema & Holkema NV. 1967.
- Hall Clark J. R., *A Concise Anglo-Saxon Dictionary. Fourth Edition*. 1960. Toronto: University of Toronto Press. 1984.
- Harkness Albert, *A Short Latin Grammar*. New York: American Book Company 1898.
- Hirt Hermann, *Indogermanische Grammatik. Teil VI. Syntax I*. Heidelberg: Carl Winters

- Universitätsbuchhandlung. 1934.
- Izui Hisanosuke, *Maguna Grammatica Latina*. 1952. Tokyo: Hakusuisha 1967.
- Japan Bible Society, *The New Testament*. 1973. Japan: The Gideon International in Japan. 1985.
- Jespersen Otto, *Language: Its Nature. Development and Origin*. 1922. London: George Allen & Unwin Ltd. 1950.
- Lyons John, *Introduction to Theoretical Linguistics*. 1968. Cambridge: Cambridge University Press. 1977.
- May Herbert G. and Metzger Bruce M., *The New Oxford Annotated Bible with the Apocrypha: Revised Standard Version*. 1962. Oxford: Oxford University Press. 1977.
- Mitchell Bruce and Robinson Fred C., *A Guide to Old English: Fourth Edition Revised with Prose and Verse Texts and Glossary*. 1964. New York: Basil and Blackwell Inc. 1986.
- Mitchell Bruce, *Old English Syntax: vol I, vol II*. Oxford: Clarendon Press. 1985.
- Mossé Fernand, *Manuel de L'Anglais du Moyen Âge: Des Origines au XIV Siècle*. I Paris: Aubier. 1946.
- Nakayama Tsuneo, *Classica Grammatica Latina*. Tokyo: Hakushuisha. 1987.
- Nestle Eberhard D, *Novum Testamentum Latine*. 1906. Stuttgart: Wüttembergische Bibelanstalt. 1927.
- Pyles Tohmas and Algeo John, *The Origins and Development of the English Language*. 1964. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc. 1982.
- Robertson Stuart and Cassidy Frederic G., *The Development of Modern English*. 1934. New York: Prince-Hall Inc. 1955.
- Rosenborough Margaret M., *An Outline of Middle English Grammar*. 1938. Connecticut: Greenwood Press. 1970.
- Schinzinger Robert, Yamamoto Akira and Nambara Minoru, *Wörterbuch der Deutschen und Japanischen Gegenwartssprache*. 1987. Tokyo: Sanshusya
- Sweet Henry, *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon*. 1896. Oxford: Oxford University Press. 1987.
- Tanaka H., *Lexicon Latino-Japonicum*. Tokyo: Kenkyusha 1952.
- Toller T., Northcote and Cmapbell Alistair, *An Anglo-Saxon Dictionary. Supplement*. 1955. Oxford: Oxford University Press. 1973.
- Willson Alastair, *Latin Dictionary*. 1965. New York: David Mckay Company Inc. 1983.
- Willson James Bright, *The Gospel of Saint John in West-Saxon*. 1904. New York: AMS Press Inc. 1972.
- Wright Joseph and Wright Elizabeth Mary, *Old English Grammar*. 1925. Oxford: Oxford University Press. 1975.